〔中国陶磁ー豊饒と洗練ー展によせて〕

青花牡丹唐草文面盆をめぐって

白磁の素地にコバルト顔料で文様を描き、その上に透明釉をかけて焼成し、白地に青の文様（花）を呈色させる技法やその作品を、中国では「青花」と呼びます。唐時代にはすでに釉下彩にコバルトを用いた例がありますが、この技法が大きく発展し、本格的な生産が始まるのは、元時代の景徳鎮窯においてでした。

南宋から元時代にかけては、素地に文様を刻む「刻花」、型押しによって文様を表す「印花」、鉄分の多い顔量を用いて黒褐色の文様を描く「鉄絵／黒花」など、様々な技法による文様表現が盛行していました。その中で「青花」は、純白の白磁と美しいコバルトブルーの文様の鮮烈な色の組み合わせや、筆による精緻な絵付けによって新たな文様表現の可能性を広げ、中国国内はもとよりアジア、中近東、欧州に至るまで広く人気を博し、世界の陶磁器の歴史に大きな影響を与えることとなりました。大和文華館の中国陶磁コレクションの中にも、明から清時代にかけての青花の名品が何点かありますが、今回はその中から、器形や文様が珍しく、明時代初期の中国青花の特徴を考える上でも興味深い「青花牡丹唐草文面盆」を取りあげてみたいと思います。

「青花牡丹唐草文面盆」（図１）は、側面上部に「大明宣德年製」という青花銘があり、明の宣德年間（1426～35）に景德鎮官窯で作られたものであると考えられます。まず文様を見てみますと、側面には内外ともに、牡丹や菊などの八つの花が繋がった花唐草が繞らされています。花の種類は内と外では異なり、内側の花唐草は八つの花の種類が描き分けられていますが、外側の花唐草はやや不明瞭な描き方となっています。外開きの縁の表部分には、四稜形の窓を八つ設け、種類の異なる花文様を中に描き、窓と窓の隙間を唐草風の曲線文で飾っています。そして見込み（図２）には、如意頭を円状に配したような、或いは雪の結晶のようにも見える珍しい文様が表されています。細やかで潤いのある白磁、濃淡の微妙なムラが美しいコバルト、適度に余白のある優美な文様構成などに、永楽・宣德期の景德鎮官窯の青花の特徴を見ることができます。

次に器形を見てみますと、胴の裾が張った筒状の深鉢で、口部に外開きの平たい縁がついています。これは中国の伝統的な陶磁器にはない珍しい形で、ペルシアの金属器（図３）を模したものであることが指摘されています。先に述べた見込みに表された文様も、アラベスク文様を連想させる幾何学的な図案で、イスラム文化とのつながりを感じさせます。大和文華館では「面盆」という名称が付いていますが、手や顔を洗う際に使うもので、「洗」と呼ばれることもあります。他に、ＭＯＡ美術館・梅沢記念館・故宮博物院（台湾）・トプカプ宮殿博物館（トルコ・図4）などに類品があります。トプカプ宮殿博物館所蔵の作品の見込みにも、曲線を組み合わせた一種のアラベスク文が描かれており、この種の器は、器形や西方風の文様から、イスラム圏へ輸出するためのものであったと思われます。

はじめに述べましたように、青花は元時代の景德鎮窯において盛んに制作されるようになったのですが、トルコのトプカプ宮殿やイランのアルデビル廟などに元の青花の最大のコレクションが残っており、またインドやエジプトなどにも多くの破片が出土していることから、青花は主にイスラム圏への輸出磁器として制作されていたことが知られています。数段の文様帯を円心状に重ね、空間を文様で濃密に充填させる元の青花の特徴には、イスラムの工芸品からの影響が窺え、また顔料のコバルトの多くもイスラムから輸入するなど、イスラム文化と深いつながりをもっていました。

明時代に入ると、青花の技法や様式が洗練され、白地を生かした優美な文様構成へと変化し、宮廷内でも青花が愛用されるようになり、景德鎮の珠山に御器廠と呼ばれる官窯が置かれます。その一方で、永楽帝が積極的な外交貿易政策をとり、イスラム圏に遠征したことから、永楽期にはイスラム好みの青花も多く制作され、アラベスク風の文様や、ペルシアの金属器を模した器形がしばしば見受けられます。宣德期の青花は、形・意匠ともに永楽のものをよく受け継いでいますが、宣德期に入ってから、官窯では「大明宣德年製」と元号の入った青花銘を記すことが恒例になります。本作品には宣德銘がありますが、ＭＯＡ美術館やトプカプ宮殿美術館所蔵のものなどには銘がなく、それらは永楽年間の制作ではないかと考えられています。本作品は他の類品と比べ、花唐草の奏でるリズムが若干重たく、花の種類も明確でないところがあり、宣德期における永楽作品の写しとしての性格が窺えます。永楽風の写しは、宣德初期に焼かれたと思われる無銘の作品に多いのに対し、宣德銘が記されるようになると、青色がはっきりと濃い、宣德独自の特色が見られる青花が多くなります。その中で本作品は、銘がありながら永楽作品の写しであるという中間的な特色を持っています。また白磁が青味を帯びコバルトが滲むという色調も永楽期の特徴に近く、永楽から宣德への青花の展開を考える上でも、貴重な作品といえます。（図3はUpham Pope, A survey of Persian art. Vol.XII, Meiji-Shobo, 1967より、図４は『トプカプ宮殿の中国陶磁』第１巻、講談社、1987年より複写いたしました。宮崎もも）

図１ 青花牡丹唐草文面盆
（大和文華館蔵）

図２ 図１の見込み部分

図３ BASIN,BRASS,ENGRAVED AND INLAID WITH SILVER (Museum of the Gulistan Palace)

図４ 青花花唐草文洗
（トプカプ宮殿博物館蔵）

季刊 美のたより №155
平成18年７月７日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.